



第3分科会

圏域外から人を呼び込む施策

～圏域人口100万人のポテンシャルを活かした圏域経済の活性化について～

各自治体の取組

【発言順】

愛媛県内子町長 小野植 正久

大分県日出町長 本田 博文

大分県由布市長 相馬 尊重

大分県竹田市長 土居 昌弘

大分県大分市長 佐藤 樹一郎

《座長》愛媛県八幡浜市長 大城 一郎

意見交換

自治体における圏域経済の活性化に向けた取組

◆東京都豊島区との交流事業

平成22年から東京都豊島区内において町単独で「観光物産展」を催し、平成27年には大洲市・西予市と連携し同展「三町味色（みまちみいろ）」を開催した。これらの事業は、南予地域のファンの拡大と町産品の販路開拓を目的とし、町内事業者とともに実施してきた。

内子町ではこのような取組が豊島区から好評価を受け、平成25年に「防災協定」、令和3年12月27日に「文化交流都市協定」の締結を行ってきたところである。今後、各分野において更なる交流が深まることが期待できる。

また近年では、豊島区内での「観光物産展」がお手本となり、平成27年創設の町独自の町産品販路開拓助成金（上限50万円）を利活用し、各事業者において「首都圏、関西圏、海外」など幅広く営業活動が進んでおり、年間の売上も右肩上がりとなり地域活性化の一端を担っている。特に目を見張るものは、台湾の高級百貨店や食品展において事業者とともに販促活動を行ったことで、今では商品のレギュラー化が図られており、会社の売上が20%以上となるなど成果も見えてきているところである。

「地産地消」も大切だが、人口減少により食品等の消費が少なくなっていることから「地産外商」の取組が必要となってくる。

◆農泊推進事業

内子町では、昭和60年代から石畳地区で村並み保存運動を展開。農村の暮らしや景観の保全と活用に取り組んできた。その後、全町的な地域づくり運動を展開、現在は41の自治会ごとに住民自らが10年間の地域づくり計画を策定している。この間、平成16年にはグリーンツーリズム協会を設立、小規模な宿がいくつもでき、町内で宿泊できる環境が整った。平成30年からは、ふるさと財団の助成を受け、農泊推進に着手。専門家の指導を受けながら、内子ツーリズム推進協議会を設立。先進地視察や研修会を開催する中で、地域の素材を磨

き、多くのモニターツアーや体験プログラムの造成（滝打たれ体験、移動式檜風呂、サップ、ちゃりんぐなど）を行ってきた。

令和元年からは、大分県臼杵市や宮崎県高千穂町など九州地域との連携を模索、九州四国回遊ルートの形成に取り組み、令和2年にはWEBサイトを強化し予約システムを構築。インターネットを通じた体験プログラムやツアーの販売を行っている。令和3年3月にはくらたび臼杵及び宮崎県高千穂町観光協会と連携したモニターツアーを実施。実際に九州地区で観光事業に携わっている方々に内子町の体験を行ってもらい、問題点の洗い出しなどを行い、今後の九州四国周遊ルート形成につなげていくものとなった。



くらたび臼杵モニターツアー サイクリング

取組を実施する上での課題

今後において、上記の取組などをどのように進展させ地域活性化につなげていくかが課題となる。

1つの自治体が単独で取り組むのではなく、地域間連携がとても大切である。



八日市護国の町並み

発言要旨



内子町長の小野植でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

当町の概要について簡単に説明させていただきます。人口約1万6,000人、面積約300km²、山林77%ということで、中山間地域でございます。基幹産業は、農林業でございます。主な作物は柿、ブドウ、キウイ、梨、桃、栗などの果樹生産が盛んな町でございます。

町の中には、昭和57年に国の指定を受けました、重要伝統的建造物群保存地区の町並みがございまして、また重要文化財として芝居小屋であります内子座など、4つの建物が指定されているという状況でございます。

またスキー場と、3つのコースを備えるゴルフ場もございます。

そのような町ですが、農産物や特産品等の販路開拓、首都圏等からの誘客を図るために、東京都の豊島区巣鴨で、平成22年度から観光物産展を開催するなど、豊島区との交流事業を進めているところであります。

その後、交流する中で、防災協定や、令和3年12月には、文化交流都市協定を結ばせていただくなど、このようなつながりをより加速させていく考えであります。また、町産品の販路拡大については平成27年度に、販路開拓助成金制度等も創設しまして、営業活動を続けてきておりまして、首都圏や関西圏、海外などでも販売額を伸ばしておりまして、地産外商の取組を行っているところでございます。

これらの取組によって、内子町を知っていただ

き、県外からも来ていただきたいということで、行っているところでございます。

また農泊事業についてでございますが、平成16年にグリーンツーリズム協会が設立され、小規模な宿がいくつも整備され、町内で宿泊できる環境が整ってまいりましたので、地域資源を磨きながら体験プログラムの造成を行っております。

令和元年からは大分県臼杵市や宮崎県高千穂町と、九州四国周遊ルートの造成も模索いたしまして、令和2年には、インターネットを使った商品の販売を行っています。

また、令和3年には「くらたび臼杵モニターツアー」を実施いたしまして、実際に九州地区で観光資源に携わっている人から、問題点等をいただきましたので、今後、九州四国周遊ルート形成につなげていきたいと考えております。

取組を実施するうえでの課題でございますが、単独自治体だけで、様々な事業を行うには、限界があると考えているところでございます。

今後の展望でございますが、令和4年度に全国に向けて、電子雑誌により観光特産品等のPRを行う魅力発信事業に取り組むこととしておりますが、引き続き首都圏や関西圏、また海外での積極的な営業活動を行うなど、内子ファンの拡大と、町産品の販路拡大、観光客の誘致事業に努めていきたいと考えております。

また、インバウンド事業を促進するためには1つの自治体が単独で取り組むには限界がございますので、地域間連携、こういったものを図っていく重要性を感じているところでございます。

以上でございます。



内子座

自治体における圏域経済の活性化に向けた取組

■「ハローキティとくらすまち」の取組

町内にサンリオキャラクターのテーマパーク『ハーモニーランド』を有することから、平成28年より「ハローキティとくらすまち」を宣言し、サンリオエンターテイメントと連携した事業を行っている。観光拠点としてのハーモニーランドのPRだけでなく、移住施策やふるさと納税などにも紐付けて取り組んでいる。

特に、プロモーション動画の作成やタブロイド紙の発行は、大都市圏へのPRにつなげることで、町内への移住促進や地域経済活性化に寄与している。

(具体的な取組)

- ・タウンプロモーション動画
「しあわせリボン」の作成
- ・タブロイド紙「かわいい新聞」の発行
- ・庁舎や駅舎の装飾
- ・オリジナルマンホールの設置
- ・オリジナルデザインの住民票や婚姻届けの作成など

■「ひじはく」の取組

日出町ならではの食・自然・歴史文化を満喫する体験プランを提供する事業を行っている。本取組では、地元住民が「誘い人(コーディネーター)」となることで、町外からのプラン参加者が町内の住民や産業と直接ふれあい、地元の活性化につながっている。

(プラン数)

・平成28年度	43件	・平成29年度	78件
・平成30年度	74件	・平成31年度	52件
・令和2年度	45件	・令和3年度	51件



日出町：ひじはく

■「ひじまんぱく」の取組

町内宿泊施設の宿泊者を対象に、最大で1人1泊3,000円の割引を受けることができるキャンペーンを開催。対象施設は町内8施設で、令和3年10月22日から令和4年3月13日の期間を対象とした。

町内宿泊者を増やし、滞在型の地域内観光へつなげることで、コロナ禍で落ち込んだ町内経済の活性化につなげた。(実績) 8,506人



日出町：しあわせリボン

取組を実施する上での課題

【観光】

・域外からの集客を期待できるスポットは多くあるものの、個々の観光地が点在していること、また、別府・湯布院に近いことなどから、滞在時間の短い「通過型観光」から脱却できておらず、観光収入の大きい「宿泊型・滞在型観光」へと移行する必要がある。

・町内には、令和3年度より営業を開始した「グランヴィリオホテル別府湾一和蔵一」をはじめとした5つのホテルに加え、景観の良さなどを活かした個人経営のゲストハウスも複数存在するため、これらの宿泊施設を活用して圏域外から人を呼び込み、地域を活性化させる取組が求められる。

【移住】

・住環境の良さを中心にPRしているが、移住希望者の懸念事項である「仕事」については、大分市や別府市が通勤圏内であるという情報にとどまっており、各市の求人求職情報などが紹介できれば、より移住希望者ニーズに対応できると考えられる。

発言要旨



日出町長の本田でございます。

日出町は面積約73km²という小さな自治体でございます。別府湾の北に位置する町です。

町が、東西に広がっておりまして、南は別府湾に面しており、町全体が南向きで住むのに適しているということで、若い世代が家を建てて住んでいただいている状況がございます。

人口約2万8,000人のまちで、豊かな自然と歴史の町という表現をしている一方で、観光資源としては、全国に多くのファンを持つサンリオキャラクターのテーマパークである『ハーモニーランド』がございます。

さて、自治体における圏域経済の活性化に向けた取組でございますが、まず1つ目が、ハーモニーランドと連携した事業を行っております。町は「ハローキティとくらすまち」を宣言しており、サンリオと連携した事業を行っております。

観光拠点のハーモニーランドのPRとあわせて、その知名度を移住施策やふるさと納税の広報に活用し、お互いを高め合うように活動している状況です。

そうした中、コロナ禍の状況を受け、全国に元氣と笑顔を届けるために「しあわせリボン」というショートムービーを作成して発信したところです。また、ハローキティの絵柄入りの婚姻届等で、ハーモニーランドとの連携をアピールするとともに、ハローキティを使ったマンホール等でも、人を呼び込む施策に取り組んでいるところです。

それから2つ目が「ひじはく」の取組です。体験型観光を総称して、このような呼び方をしていま

す。6年前から取り組んでおりまして、日出町の食や自然、歴史文化を満喫できる体験プランを提供しております。昨年度は51件のメニューを提供しており、着物を着てのまち歩き、ヨガ、お寺での座禅、写経、それからトレッキングやフットパス、底引き網、といったメニューを実施し、申し込みが定員を上回るプランもございます。

地元住民が「誘い人」となり、参加者が町内の自然や住民と直接触れ合うことで、日出町を体験するとともに、住民も、地域資源に誇りを感じるようになってきていると聞いておりますし、活性化にもつながっていると感じています。

それから「ひじまんぱく」の取組についてです。町内には5つのホテルをはじめ、多くの宿泊施設があるのですが、コロナ禍で低迷する宿泊需要を喚起して、経済を下支えするために、これら宿泊施設を利用する方に対し、宿泊費の助成を行ってきたところです。

取組を実施する上での課題ですが、町としては集客できるスポットがありますが、点在していることや、大規模観光地である別府市に近いこともありまして、通過型観光となっております。

宿泊を伴う滞在型観光への移行が大事でございます。なお、先ほど申し上げましたが、町は小さいながらも、特徴のある宿泊施設が多数ございます。これらの施設を活かして、圏域外から人を呼び込むことに取り組みたいですと思っています。

最後に今後の展望ですが、観光面では、ニーズに合わせた多様な滞在プランを提供できるように、先ほどの「ひじはく」を活かして、圏域内の観光施設などと連携したツアー商品の造成に取り組めないかと思っています。

また町内には、高糖度のトマトや城下かれい、ぎんなんといった特産品がありますので、圏域内の特産品と互いの魅力を活かしたセット商品などの開発で、産業の振興につなげていきたいと思う次第です。

そのためには、圏域一体となった情報発信が効果的ではないかと思っております。

以上でございます。

自治体における圏域経済の活性化に向けた取組

由布市の主要産業である「観光・宿泊業」への支援等を通じて、圏域内での交流を図る。

1 由布市5千人宿泊応援割

閑散期となる冬の宿泊施設への支援として実施。1人あたり2万円を上限に宿泊料金の70%を補助。5人以内の団体で、そのうち1人以上由布市民を含むこと。

2 ゆふお得旅キャンペーン

誘客を促進して地域経済の活性化を図る。公共交通機関(JR、バス)を利用して由布市にいられた方に対して、1,000円分のクーポン券を贈る。



湯の坪街道

3 観光マップやパンフレットの作成

福岡市など都市圏からの誘客を図るため、大分県の西の玄関口となる日田市などと共同で、久大本線沿線の魅力を紹介する観光マップやパンフレットを作成してPR活動を実施し、呼び込みを図る。

4 サテライトオフィス開設

リモートワークやワーケーションが普及する中、温泉地である湯布院にサテライトオフィスを設置して、交流人口の拡大により活性化を図る。

コロナ禍や働き方改革によって、人の流れは大きく変化しており、人の移動や交流が大きく制限

され、その結果、観光客は大幅に減少し、観光地の多くの事業者は事業継続の岐路に立たされている。その一方で、休暇を取って観光地や保養地を訪れ、休暇中に旅先からWEB会議に出席するなど、新しい仕事のスタイルとしてワーケーションが広がりを見せている。

由布院サテライトオフィスでは、都市部の企業に対して、都会の喧騒から逃れ解放感のあるワークスペースで仕事に打ち込み、アフター5には温泉でリフレッシュしてメリハリのある新しい仕事のスタイルを提案し、呼び込みを図る。



由布院サテライトオフィス

取組を実施する上での課題

新型コロナウイルス感染症の感染拡大のため、移動制限や入国制限による旅行者の減少によって事業が継続できなくなった事業者が増加している。また、高齢化と過疎化が進行しており、多くの業種で働き手が不足している。



辻馬車

発言要旨



由布市長の相馬でございます。よろしくお願いいたします。

由布市は人口約3万5,000人のまちでございまして、大分県のほぼ中央に位置し、大分市、別府市などと隣接するまちです。

主に由布院温泉を有するまちと言った方が分かりやすいかもしれませんが、年間約380万人のお客様に訪れていただいているまちでございませぬ。

しかし、今回のコロナによって、大変大きな打撃を受けております。コロナが始まった令和2年度においては、観光客数が、60～70%減の状態でございます。昨年は少し持ち直して、約50%前後まで持ち直しました。

今年になりまして5月までの状況を見ますと、コロナ前に比べて、60～70%のお客様が、来ていただいているというような状況になっております。

特に、コロナ前は、外国のお客様もかなり来ていただいていたのですが、今は、国内のお客様が主になっております。

そうした対策といたしまして、市としましては、第1弾として「由布市5千人宿泊応援割」というのを実施いたしました。これは由布市民1人以上を含み計5人まで、市外、県外の方誰でも宿泊料の70%を補助するもので、1人上限2万円までの補助を実施いたしました。大変好評で、発売日から電話が鳴りやまなく、3日間でほぼ完売をいたしました。そういったことから、今年度も、こうした取組を計画しているところです。

また「ゆふお得旅キャンペーン」としまして、公共交通機関のJRやバスを利用して由布市にいられた方に対して、1,000円分のクーポン券を配布する事業をいたしました。

これは宿泊業だけでなく、地域経済への波及を図ろうということで、行ったものでございます。

さらに、観光マップやパンフレットを作成しました。湯布院は特に、福岡圏域から多くのお客様がいられていますので、日田市、玖珠町、九重町、九大本線沿線のまちが連携をいたしまして、観光マップやパンフレットを作成し、PR活動を実施し、呼び込みを図っているところです。

また、サテライトオフィスを開設いたしました。使わなくなった市営の施設を改築し、6月1日にオープンいたしております。観光客が減る中、休暇を取って観光に来て、休暇中にもWEB会議に出席できるような、そうしたワーケーションが広がっているのを受けまして、実施をいたしました。まだ、オープンして約1か月しか経っていませんが、ほとんど毎日、誰かが利用しているというような状況が続いております。

取組を実施する上での課題ですが、このコロナの関係で事業を縮小した事業所が複数あります。それをまた元通りにしようとする際に、今度は働き手の確保が難しくなっております。高齢化や過疎化もあり、なかなか多くの業種で働き手を確保するのが難しくなっているというのが、今の課題でございます。

今後については、ようやくコロナが落ち着きつつあるなど、大いに期待していたのですが、最近の状況はまた逆風になりつつあり、大変危惧しております。

そうした中でも、コロナの影響を良い方に捉えて、地方への回帰や移住、今後もそうした傾向は続くのではないかと考えております。

そうした地方への追い風を活かしながら、これからも人の流れを促進させていきたいというふうに考えているところです。

以上でございます。

自治体における圏域経済の活性化に向けた取組

【阿蘇竹田ブランド観光地域づくり推進事業】

竹田市と阿蘇市の共同にて作成した「地域再生計画」に基づき、阿蘇市、JR九州と連携し、九州中央部における観光目的地としての立ち位置の確立を目指すもの。

・令和元年度

ブランドコンセプトの策定、二次交通に関する調査、両地域における民泊・ゲストハウス等の調査、観光資源の多言語対応状況の調査等を実施。

・令和2年度

JR九州豊肥本線の全線開通に伴う大規模なキャンペーンに連動した情報発信事業、インバウンドに向けた滞在型コンテンツの開発とモニターツアー、久住周遊バスなどの二次交通の実証実験などを実施。

・令和3年度

前年に実施したモニターツアーなどの結果を基に、実際に商品造成やプロモーション等への取組を実施。

観光資源を中心にPRを行いながら、両者を結び付けていく必要があると考える。

■インバウンドに向けて

また、阿蘇市においてはもともとインバウンドが多い地域であり、本事業もインバウンド誘客を主軸に置いた取組ではあるが、竹田市においてはインバウンドがまだ少なく、獲得していく必要があるものの、地域の迎え入れ体制の構築などハードルが高く、少しずつ進めていく必要がある分野であると考えている。



JR九州豊肥本線の全線開通に伴う大分駅前のイベント

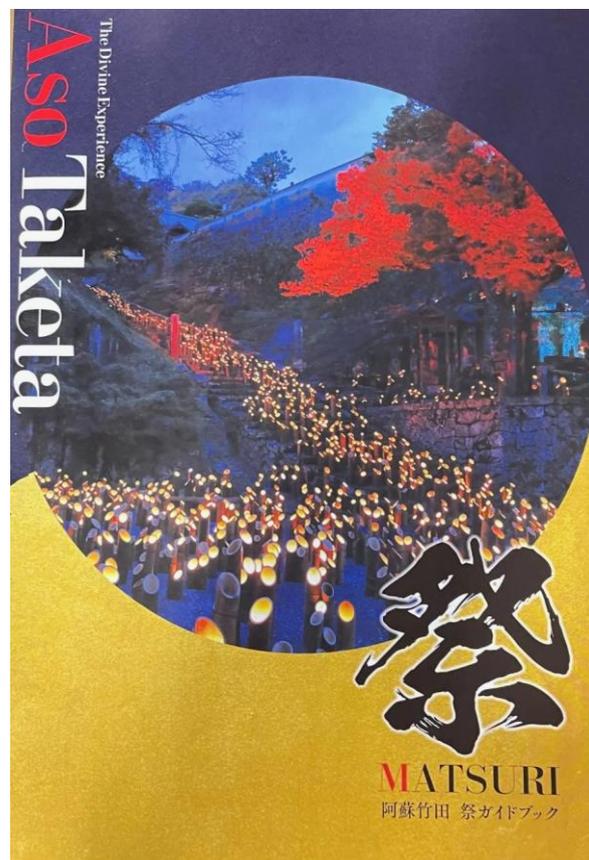


JR九州豊肥本線の全線開通に伴う大分駅前のイベント

取組を実施する上での課題

■有する観光資源の違い

地理的な類似点などを理由に連携を行っているが、「世界最大級のカルデラ」など、スケールの大きな自然景観などの強みを持つ阿蘇市と、平安時代から続くとされる岡城にまつわる歴史や町並み、世界的にも希少な炭酸泉などを強みとする竹田市とで得意とする分野が違うため、市独自の



阿蘇 竹田 祭 ガイドブック

発 言 要 旨



竹田市長の土居でございます。

まず、竹田市の紹介をしたいと思います。

「♪～謡～♪」

皆様、気が触れたんじゃないかのご心配だと思うのですが、今のは「能^{のう}の謡^{うたい}」でございます。

竹田市は、岡藩、豊後の国で一番石高が高い藩があり、岡城址があるところでして、文化と歴史の香るまちです。お祝いの席などでは、能の謡の3番を歌うという習慣が残っております。このように歌って、みんなで寿^{ことほ}ぐということも行っております。

また、自然も豊かでございます。久住連山や阿蘇山の趣、そういった山々に囲まれたとても自然の豊かなことでございます。おかげさまで、水も綺麗で、温泉もたくさんあります。様々な泉質の温泉があり、保養地としてもセールスをしているところでございます。

そういった竹田市の圏域経済の活性化の取組についてですが「阿蘇竹田ブランド観光地域づくり推進事業」に取り組んでおります。

この事業では、竹田市と阿蘇市の共同にて作成した地域再生計画に基づいて、阿蘇市、JR九州などと連携して、九州中央部における観光地としての立ち位置を確立しようというのが目的でございます。

令和元年度から始まったのですが、初年度はブランドコンセプトの策定並びに二次交通や、それぞれの地域の民泊やゲストハウス、また、観光資源の多言語対応の状況などを調査しました。

翌年度はJR九州豊肥本線全線開通に伴う大規

模キャンペーンに連携した情報発信事業や、インバウンドに向けた滞在型コンテンツの開発、モニターツアー、また、久住周遊バスなどの二次交通の実証実験をいたしました。

令和3年度ですが、前年度に実施したモニターツアーなどの結果を基に、商品造成やプロモーションを実施しているところでございます。

取組を実施する上での課題というところで、様々な課題が見えてきました。今年度、この課題解決に向けて進んでいかなければならないと思っていますところ。

阿蘇市とは、隣同士であり地理的な類似点などから連携を行っていますが、阿蘇市には世界最大級のカルデラなど、スケールの大きな自然景観の強みを活かしながら、観光事業をしています。

一方、竹田市ですが、平安時代から続くとされる岡城にまつわる歴史や町並みなどを強みとしております。それぞれ独自の観光資源を強みとしており、これをどのようにして結び付けるのか、ただいま知恵を絞っているところでございます。

また、阿蘇市はもともとインバウンドが多い地域ですが、竹田市にはなかなかインバウンドのお客様が来ていないという状況がございます。もっと積極的にインバウンドの取組を行っていきたいと思っていますところ。課題は多くありますが、今こそ、インバウンドの受け入れ体制をしっかりと確立するための絶好の機会と捉えて、早急にインバウンドの受け入れ体制を構築していきたいと考えているところでございます。

今後の展望につきましては、令和3年度をもって事業が終了しており、これを引き続き活かしながら、今後の事業展開をしていきたいと考えているところでございます。

九州で一番観光客が多い阿蘇山ですが、竹田市が愛媛・大分の圏域と結ぶ役目があると考えております。熊本県側の玄関口となるよう、引き続き考えながら、施策を打って、熊本県や阿蘇市に訪れた皆様をより多く、愛媛・大分の圏域にお招きしていきたいと考えております。

以上でございます。

第3分科会 圏域人口100万人のポテンシャルを活かした圏域経済の活性化について

自治体における圏域経済の活性化に向けた取組

本市をはじめとした圏域の観光物産展を大都市で開催したほか、圏域食材による新メニュー「豊後料理」の情報発信等を通して、圏域の物産・観光・農林水産物等の魅力発信と販路拡大及び誘客促進に向けた機運の醸成を図っている。

<令和3年度主な取組事例>

■首都圏における「おおいた物産・食・観光魅力発信事業」

◆おおいた物産・食・観光イベント「oita kitena！」

開催日：R3.10.23

開催場所：東京都中央区コレド室町テラス

大分都市広域圏観光PR事業の一環として、観光資源のPRや物産品の販売等を通して、知名度向上並びに圏域内への誘客促進を図った。

【参加自治体】大分市、別府市、由布市

【参加者数】約2,000名



おおいた物産・食・観光イベント「oita kitena！」

■食観光推進事業

◆豊後料理普及PR事業

料理提供期間：R3.10.1~R3.11.30

大分都市広域圏内の飲食店において豊後料理を提供。市は参加店舗の募集及びPRを行う。

【提供店舗】

大分市、別府市、臼杵市、津久見市、竹田市、豊後大野市、由布市、日出町の76店舗88メニュー

◆大分ふぐフェスタ

開催期間：R4.1.29~R4.2.12

「大分の食」への関心を高めることを目的に、本市の冬を代表する味覚であり、高級食材の「大分ふぐ」をテーマに、「大分ふぐ名店会」の協力のもと『大分ふぐフェスタ』を開催。期間限定でふぐランチを特別価格で提供（1食あたり税込3,000円、1店舗1日20組限定）。

■観光関連事業者に対する支援事業

◆大分市おもてなしクーポン発行事業「大分市の旅はおトクです券」

配布期間：R3.7.15~R4.3.16

大分市内の飲食店や土産店等で使用できる「クーポン（大分市への旅はおトクです券）」を発行することで、誘客と旅行消費の拡大を図った。

【配布対象者】

本事業に参加する宿泊施設が提供する「大分市の旅はおトクです券」付の宿泊プランを予約し宿泊した人（対象者は大分県民限定。ただし、一部期間は対象者を隣接する県民にも拡大した。）

【取組内容】

1回の宿泊利用につき、1人あたり2,000円分（1,000円×2枚）を事前予約した宿泊施設にチェックインする際に配布。



大分市の旅はおトクです券

取組を実施する上での課題

新型コロナウイルス感染症の拡大による社会経済構造の変化に伴い、観光客・ビジネス客の消費行動・消費指向の動向を的確に捉える必要がある。この上で、圏域内の自治体と協力することで生まれるスケールメリットを活かしながら、観光資源の更なる磨き上げ等により、圏域経済全体の底上げを図ることが重要である。

発 言 要 旨



大分市長の佐藤でございます。

熊本県に一番近い竹田市、愛媛県に一番近いのが大分市です。佐賀関と佐田岬の一番近いところは14kmしか離れていませんので、佐賀関の方から見ると四国がよく見えます。阿蘇の方から中九州自動車道が大分市の手前まで来ていまして、大分市を通過して、四国につながっていくと、本当にこの圏域が一体化すると思っております。

大分市の歴史ですが、大友宗麟の時代に北部九州6か国の守護職を務めていた時代がありました。キリシタン大名とも呼ばれ、その文化が根付いております。

産業は新産業都市の指定を受け、日本製鉄や昭和電工等が臨海部に立地し、内陸部にはキャノンや東芝、ソニーなどの工場もございます。工業製品出荷額が全国約1,700の市町村の中で15位前後に位置しています。一方、農業ですが、オオバ、ニラ、ミツバ、カイワレというような葉物の生産も盛んであり、ブランド魚「関あじ関さば」もあります。そういった特産品をしっかり発信していきたいということで、物産展を首都圏で行いました。

また、中国の武漢市と姉妹都市でもありまして、コロナ前は武漢市のイオンで大分の物産展を行ったこともあります。ただ、大分市だけでは、産品に限られますので、別府市、臼杵市、津久見市、竹田市、豊後大野市、由布市、日出町にも参加いただいて、一緒になって、豊後料理のPRの取組も行っております。

また、宿泊者を対象としてクーポン券の発行も行いました。

今後の展望ですが、この圏域で農泊やスポーツ交流などの体験型の事業を行っていきたいと考えております。

愛媛と大分は地理的、歴史的にも非常に近く、愛媛大分の圏域の皆様と意見交換を行い、様々な交流事業を進めていけたらと思っております。

先ほど、挨拶の中でお話したのですが、豊予海峡ルートはどうしてもつないで欲しいと思っております。もちろんフェリーも大事な交通ルートであります。大分市には佐賀関と伊方町を結ぶ国道九四フェリー、他に八幡浜市と臼杵市、別府市を結ぶルートはすごく大事だと思っております。

豊予海峡ルートは、先ほど言いましたが14kmしか離れていませんので、つながれば車だと約10分で海を渡れます。新幹線でつなげば、大分市から佐賀関を通り、伊方町、八幡浜市を通過して松山市に入り、松山市から高松市、岡山市へというルートになり、四国新幹線も走るようになると思えます。そうすると、先ほど竹田市長がおっしゃったとおり、九州四国が、一体の圏域になってくると思えます。

そのような取組を進めているところでございまして、伊方町長には毎回ご参加いただきながら、シンポジウムを4回開催し、情報発信を行っているところでございます。国の方にも要望活動を行っておりますが、機運の醸成を図り、地域全体で取り組んでいく必要があると思っております。

豊予海峡がつながることで、例えば、別府温泉を楽しんだ方が、愛媛に渡って道後温泉を楽しむといった九州四国を周遊する行程を考えるようになるかもしれません。

是非、このような取組を進めていきたいと考えているところでございます。

以上でございます。

自治体における圏域経済の活性化に向けた取組

◆ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル日本大会

英国湖水地方、ダルメインで2006年から開催されているマーマレードの世界的なコンテストを初めて日本に誘致し、令和元年度から八幡浜市で開催している。

日本におけるマーマレード文化の裾野を広げ、新たな加工産業の育成による6次産業化の進展、様々な関連イベントの開催による誘客促進を通じた観光振興などにより地域の活性化を図るとともに、全国有数の柑橘産地である愛媛、八幡浜のブランドイメージの一層の向上を図る。

毎回、海外を含む全国から多くの出品があり、大会に対する注目度も高まっていることから、圏域外から人を呼び込むきっかけとしても重要な取組と捉えている。

【大会実績】

・第4回大会（令和4年度）

出品数1,641作品（過去最多、44都府県及び台湾）

表彰式及びイベント：令和4年4月17日開催

来場者数：7,100人

・過去の大会

第1回大会（令和元年度）出品数 1,614作品

第2回大会（令和2年度）出品数 1,276作品

※第2回大会はコロナ禍により中止（返品）

第3回大会（令和3年度）出品数 1,421作品

取組を実施する上での課題

マーマレードは日本人にはまだ馴染みが薄く消費量も限られている。マーマレードのまちとして地域活性化を図るためには、マーマレード食文化を地域に浸透・定着させるとともに、マーマレードの消費量を増やす取組が重要となる。



第1回大会の品評会の様子



第1回大会の作品（一部）



第3回大会の受賞者の方々

発言要旨



八幡浜市長の大城でございます。

それでは、最後になりましたが私の方から、八幡浜市の紹介をさせていただきます。

八幡浜市は四国の西の玄関口で、日本一細長い佐田岬半島の付け根に位置しており、九州の別府市と臼杵市に1日20往復するフェリーが就航している「みかんと魚のまち」で、人口は3万1,000人強でございます。

また、八幡浜市では「世界」というような冠を付ける大会を2つ開催しております。1つが「ダルメイン世界マーマレードアワード&フェスティバル」、もう1つは「八幡浜国際マウンテンバイクレース」を開催しております。本日は、マーマレード大会について説明をさせていただきます。

これは、イギリスのダルメインで世界マーマレードアワード&フェスティバルが2006年から開催されております。イギリスのマーマレードは、日本で言えば、家庭の味、味噌や味噌汁のようなもので、各家庭の味があり、この家庭の味を多くの方に味わってもらおうと、品評会を行ったところから始まっております。イギリス人3名の写真がありますが、真ん中の女性、ジェーン ヘーゼルマコッシュさんが発起人でございます。

この大会に八幡浜市の女性が出品いたしました。そこから、八幡浜市でもこの大会を開催したいと、受賞者の方から、私に話があり、イギリスの日本大使館を通して、ヘーゼル家と話をしながら、ようやく、八幡浜市で2019年に第1回の大会を開催する運びとなり

ました。第1回大会から1,614の作品が集まり、非常に盛り上がったところでしたが、第2回大会がコロナにより中止となりました。今年は第4回になるのですが、過去最多の1,641の作品が全国44の都府県、海外は台湾からも出品があり、受賞者の方々も含めて、多くの方が八幡浜市にお越しになったところでもあります。

この大会ですが、集まってくるマーマレードが本当においしいということが評判にもなっております。八幡浜市の農家の奥様たちが起業した「高野地フルーツ倶楽部」は、廃校になった校舎を改修して、そこで加工品を作っているのですが、そのマーマレードが大会で金賞を受賞いたしました。全国からの注文が入るようになり、まちの産業振興につながっていると考えております。

八幡浜市がこのマーマレードに力を入れている理由ですが、マーマレードがおいしいのは、原材料である「みかん」がおいしいということも同時にPRでき、柑橘王国愛媛の中でも、八幡浜市が特においしいと思ってもらうためです。

今後の展望についてですが、臼杵市では、この大会に出品する場合の補助制度を創設していただいております。この大会の盛り上げに一役買っていていただいております。このように圏域全体でマーマレードを通して、盛り上げていきたいと思っております。

また、八幡浜市は、地域活性化企業人制度を活用し、JALの社員を派遣していただいております。その職員の力によりまして、今年の「やわたはま産業まつり」と同日で、Sea級グルメの全国大会も併せて開催することとしています。その時に是非やりたいと考えていることがありまして、東京や大阪から八幡浜のSea級グルメに来る場合に、大分空港に降り、別府、臼杵、佐賀関からフェリーで八幡浜に来ていただいて、松山空港から帰る、また反対に、松山空港に来て、八幡浜を経由して、大分空港から帰ってもらうような形のツアー商品を作りたいと考えております。2つの空港を利用し、この圏域を周遊するようなことを事業化していきたいと思っております。

以上でございます。

佐藤 樹一郎

大分県大分市長

八幡浜市長が提案されました松山空港と大分空港を使った周遊ツアーは、大変すばらしいなと思いました。Sea級グルメと産業まつりで、誘客を図っていただきたいと思います。

内子町長にお伺いしたいのですが、豊島区は、庁舎の上層部が分譲マンションであったり、電動バスを走らせたりして様々な新しい取組をされておりまして、私たちも勉強しないといけないなと思い、豊島区長のところに行き、意見交換をさせていただきました。

豊島区で物産展を開催するようになった経緯について教えていただけないでしょうか。

小野植 正久

愛媛県内子町長

都心で物産展を行う際に、内子町の産品に興味を持ってもらえそうなターゲットを考え、そのターゲットが多いところを探していったときに「お年寄りの原宿」として売り出していた巣鴨に目を付けました。

そこで、豊島区へお伺いして、区の方から地元団体等をご紹介いただきまして、内子フェアを開催する中で、巣鴨の地域の方と餅つきなどの体験から交流を深めていきました。

そういったことがスタートでございます。

資料にも記載していますが、防災協定や観光物産交流で、内子町から様々なイベント等に出かけていきながら、少しずつ交流が深まってまいりまして、昨年には、文化交流も行っております。

様々な内子町の産品を東京で売のですが、やはり、内子町を知っていただいて、こういう町が四国にあるということを確認いただいて、最終的に移住いただけるようなところを目指して取り組んでいきたいと思っています。

また、豊島区の庁舎ですが、下層の庁舎部分で、災害対策ゾーンという部分があったりして、上層のマンション部分も超高層でして、大分市でも、

豊島区の庁舎部分と同じような取組をされているとお聞きしております。

様々なところと豊島区はお付き合いをされているみたいで、その中の1つが内子町ということですが、豊島区は防災関係に力を入れておりまして、防災用に大きな土地を購入され、地下に雨水を溜めるところでありますとか、街の中に広大な広場をつくって、そこを避難場所にするなど、先進的な取組をされておりまして。

私たちも一緒に勉強させていただいているところです。

土居 昌弘

大分県竹田市長

内子町の取組で、令和3年3月に臼杵市と高千穂町と連携をして、ツーリズムの可能性を探っているんじゃないですかね。モニターツアーを実施する中で、こういった課題が見えてきたのでしょうか。また、その課題をどのように乗り越えようとしているのか、お聞かせいただければと思います。



国指定史跡「岡城跡」

小野植 正久

愛媛県内子町長

内子町は、町並み保存や歴史文化を大切にしながら、誘客していこうということにしています。

そういう中で、内子町は海がない山間部のところで、自転車をうまく使っていけないかということで、大分と愛媛の間でも、過去にサイクリングの交流もあったかと思うのですが、内子町でもモニターツアーを行わせていただきました。

ただ、地域でのサイクリングについては、まだまだ盛り上がっている状態ではございません。

「小田川シクロクロス」という大会を年に1度行っておりまして、2019年には世界選手権代表候補選考会も合わせて行われましたが、まだ町全体での盛り上がりまでいたっていません。

まずは地域から盛り上げていきたいと思っておりますので、モニターツアーで外の視点から指摘をいただきました。

いただいた課題等については、これから取り組んでいくこととしています。

八幡浜市での世界大会の盛り上がりは、どのように感じてもらっていますか。

大城 一郎

愛媛県八幡浜市長

今年は、本国イギリスの大会が5月に開催されるということもあり、4月に前倒しして開催したのですが、通常の週末にも関わらず、大いに賑わいました。

やはり、コロナで外出自粛やイベントの中止が続いてきており、久しぶりのイベントということもあったのかもしれません。

マーマレードの世界大会をするということで、何千人も集まるような大会になりまして、すごく盛り上がりまして、来られた方々には本当に喜んでもらいました。

やはり、世界一のマーマレードを食べることができまして、多くの女性に関心をいただいております。この大会については、女性客を増やしていくことがキーポイントと思われました。

本田 博文

大分県日出町長

愛媛県のしまなみ海道ですが、サイクルツーリズムでクローズアップされているのをよく見ます。しまなみ海道から南の方の愛媛県南予地域でのサイクルツーリズムの広がりについて、お聞かせいただけないでしょうか。

大城 一郎

愛媛県八幡浜市長

サイクリングに関しましては、愛媛県の中村知事が、先頭を切って走ってもらってまして、20の市町の首長がライダースーツを着てサイクリングをしたこともあります。



「愛媛マルゴト自転車道」というのを設置しまして、愛媛県内のいたるところでサイクリング大会を開催しておりますし、ブルーラインを引いて、そこに目的地まで何kmという表示もしております。私たちのところでも、佐田岬半島を走る「サイクリング佐田岬」というのを年に1回開催しておりますので、愛媛県内のいたるところで、サイクリングがブームになっているのかなと感じております。



しまなみ海道がサイクリストの聖地というものになれば、愛媛県を「サイクリング県」に、サイクリストの聖地を様々なところに作っていき、そして、サイクルアイランドにしていこうというような思いもあります。

そのような意気込みで取組を行っております。

大城 一郎

愛媛県八幡浜市長

時間も迫ってきたようですが、最後に私の方から「空の駅」のPRをさせていただければと思います。

先ほど大分市長から、豊予海峡ルートという提案もありましたが、空の駅ということで、22の自治体の首長が集まりまして「空の駅利活用勉強会」が2022年1月17日に発足をしております。

道の駅が全国に1,000か所以上できておりますが、道の駅の広い敷地を活かしてヘリポートを設置すれば、そのヘリポートからヘリポートへ移動できるということで、空の駅を推進していこうではないかということです。これは、災害救助や、救急医療、観光、レジャー、そして地域間移動といった様々なことに活用ができるのではないかと考えております。



道の駅 八幡浜みなと



ヘリポートを、それぞれの駅に設置することさえできれば、後は、民間のヘリがその拠点を結んでいくというような事業になっておりまして、国

土交通省の航空局とも話をしながら、この事業を進めていきたいと思っております。

広い敷地の道の駅があれば、そこにヘリマークを付けるだけで完了しますので、費用もあまりかけずに実施することができます。空の駅を利用して観光にもつなげていきたいと考えておりまして、九州四国間の近いところであれば15~20分で海を渡ることができます。

ヘリの料金は高いですが、急がなければならない時など、空の駅がつながっていればすぐ行けるようになり、利用価値はあると思います。

これから、ヘリ移動や空飛ぶクルマという時代が来るかと思っておりますので、そのようなところを見据えて、空の駅利活用勉強会に参加していきたいと思っております。

1つの提案として、受け取っていただければと思います。

佐藤 樹一郎

大分県大分市長

昨日、大分市では「道の駅のつはる」の近くにある「のつはる天空広場」で、空飛ぶクルマの試験飛行が行われました。空の駅と重なる取組と感じましたので、勉強させていただきたいと思っております。



空飛ぶクルマの試験飛行（令和4年7月13日）